

リリー賞 (精神障害者自立支援活動賞) 表彰式がありました

2015年3月20日、東京都中央区のベルサール八重洲にて開催された第11回リリー賞表彰式。

この賞は、困難な状況を克服して社会参加を果たした当事者および支援を行っている方々のうち、特に優れた活動をしている方を顕彰し、あわせて副賞（精神障害者部門100万円、支援者部門50万円）を贈ることにより、経済的にも支援しようというものです。



副賞の100万円が授与された精神障害者部門の横野綾さん。

各受賞者の活動内容はHPを参照ください。
(<https://www.schizophrenia.co.jp/support/lilly/award/index.aspx>)

4組（人）が受賞されたのですが、今回のキーワードと思われたのが精神障害と“食”の関係。

精神障害者部門受賞の《いこいの場ほっとハウス》によれば、「23年間この憩いの場を提供し続けられたのは、当事者たちが一緒に食事をするところに基本を置いたからだ」とのこと。

支援者部門受賞の《NPO法人多摩草むらの会》は、「職業支援のためのレストラン経営で一番こだわっていることは品質とメニューの多さ。妥協をしない取り組みが当事者たちのプライドを刺激し、それが“生き生き”につながっている」と話してくれました。

まずは食べる。できれば食べ物は自分たちで用意する。そのうえで、あわよくばお金も儲けてしまおう。そういうよい連鎖の可能性が感じられました。

受賞者と共に大きな注目を集めていたのが、プレゼンターとして参加していたお笑いコンビ「松本ハウス」。ご存じの通り、ハウス加賀谷さんは統合失調症の当事者です。現在、執筆活動のほか多くの公演をこなしていますが、この日は「統合失調症刑事^{デカ}」なるコントで会場を大いに沸かせていました。



統合失調症デカ登場。



警察手帳ではなく、障害者手帳を突きつける。

斎藤環先生が 日本精神科看護学術集会で、 「オープンダイアログ」をめぐる 最新情報を講演します

“開かれた対話”を意味する「オープンダイアログ」。精神的クライシスにある人への治療的介入の一手法として、フィンランド西ラップランド地方にあるケロプダス病院で1980年代から実践が続けられてきました。今、この手法が注目を集める理由は、その突出して高い治癒率にあります（詳しくは本誌2014年7月号、2015年3月号を参照ください）。

2年間の予後調査で初発患者の82%の症状を、再発がないか、ごく軽微なものに抑えるなど、目覚ましい成果が得られています。

本講演では、現在、『オープンダイアログ入門（仮）』の執筆と、最新の原書『Open Dialogues and Anticipations』を翻訳中の斎藤環氏に、「オープンダイアログが秘める可能性と、日本の精神科医療に与える影響」について解説いただきます。日精看大会の3日目（最終日）ですが、ランチョンをぜひ聞きにきてください。



- ランチョン開催日時：
2015年6月20日（土）
（日精看大会3日目）
- 演者：斎藤環先生
（筑波大学教授）
- テーマ：「オープンダイアログは精神科医療に何をもたらすか」

ニュース

「卓球を通して健康寿命に 貢献する会」が発足

2015年3月15日、「卓球を通して健康寿命に貢献する会」（朝日エルググループ企画）の発足式が、東京都看護協会を会場に開かれた。

高齢者も若者も日常的に卓球に親しむことにより、筋力や心身の活力の低下を予防し“健康寿命”を伸ばそう、という趣旨のもと、「健康卓球」の普及を目指して発足したものだ。当日は、趣旨に賛同する医療技術者、卓球選手、卓球に造詣の深い著名人らが招かれ、

講演あり、実技ありの賑やかな会となった。

この会には、東京都看護協会と日本精神科看護協会も協力団体になっている。

日本精神科看護協会業務執行理事の仲野栄氏は、「多くの精神科病院には卓球台があります。私も患者さんとよく卓球をしました。私も患者さんと看護師がお互いをよく知り合うことができます。メンタルが弱った時、自分に自信がなくなった時も、卓球でちょっとすっきりすると復活できます。健康卓球が一大ムーブメントになるとよいと思います」と話した。



妙技を披露中のデザイナーのコシノ
ジュンコさん。



卓球を始めて35年になる飯田さん（90歳）。
週に5回練習するという。



日精看の仲野栄氏も挨拶。